



神聖かまってちゃんとかそつたれネット時代の 戦い方

タマネギ剣士のBeat It

いまの時代はなんでもできる。

と云うが、ほんとうにそうだろうか。↓

それはたしかに、文字がなかった時代に比べれば。通信技術はもはやエレキテルの発明を超えてエーテルの開放をプライド高田延彦のふんどし太鼓をみまもるがごとくもう行くところまでいっている。物体を瞬間移動させるどこでもドアを待つのみである。一言でいうと、便利ということだ。で、「だからなに？」ってかんじだ。

まーそりゃーねー、徴兵制度もないですし（「学校」は徴兵制度にみえますけど）、イノシシに突進されてハイエナのエサになることもなし、サソリに刺されて砂漠の真ん中おっ倒れることもない。文明と文化度の高さによって身が守られている。衛生状況もいい。で、だからなに？



↓

はいはいはい、躁！わたしはSOSO！！って曹操じゃねえよ！AH—HA？ユア ソウ
ソウ？ OH-イツァ ソウソウワールド。アイムファインサンクユー……。

…なんでも「できる」ってのはつまりこういうことだ。

…理解不能と感じたものも取り扱えることだ。

それを許容できる人間。面白がれる人間。そういう者だけが「いまの時代なんでも～
」と人にいっていい。

たとえば、週刊少年ジャンプでNANA↓

たとえば、週刊少年ジャンプでNANAみたいな性描写ガンガンあるマンガ連載してもらえるかと云えばむりだ。人はこういう。「ジャンプに合うようなマンガにしないと。それか、少年ジャンプじゃないところに連載目指せば。そんなに描きたかったら個人で同人誌でやってみれば？」と。

「なんでもできる」っていうのはつまり、やりたいならだれにも当たらないところでやれるよということなのだ。当てたい人たちがいる場所にボールを投げれないのなら、全然なんでもできないだろ…。

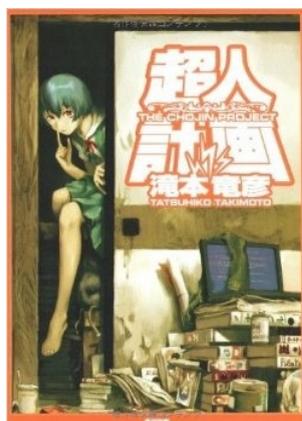
週刊少年ジャンプに載っけて、その読者にわたしのマンガを読んで欲しいという願いなのに、読ませたい内容を変更するっていうのは「いまの時代なんでもできる」と矛盾する。ちっとも、思ったとおりにできないからだ。

↓

知らぬ間にわたしたちはことばの意味を拡大解釈していたのだ。
。 ほぼ誰も振り向かない場所ならば表現の場は開かれているということである。

自己探求だけなら作品は日記に書けばいい。↓

自己探求だけなら作品は日記に書けばいい。それをしないのは他者を求めているからだ。作品を人にみせたい、できれば多くの人に、というのは自己顕示欲を満たすこと以外に、人から認められたい、褒められたい、好かれたいという思いが必ずある。だから、人は表現を見てもらいたくないと感じつつ恐れ恐れながらも人に見てもらいたいのだ。



↓

なんでもできるぞというのとは便利なことば。言いかえると「おまえずっとたまねぎ剣士だぞ！」っていわれているようなものである。

つまり、ばかにされているのだ。



が、そんなマネごとができるか、って話である。
。前の世代がやったことをなぞるなんてダサくて出来るわけがない。なぜならば、わたしは「今」生きているからだ。

↓

なんでもできる時代だからやれることではなく、なんでもできるといわれてる時代にできないとされていることをやらなければいけない。それが、上の世代から解き放たれる唯一の方法である。

。



神聖かまってちゃんのなにが話題だったかといえ
ばネット生中継をつかったことだ。

だが、それは本質ではない。



彼らが核心的だったことは警察署に突っ込んでいったことである。2010年、の子（ギター・ボーカル）はパソコンを片手に渋谷駅の交番の目の前で絶叫。マイケルジャクソンの「ビートイット」を踊った。不審者すぎるのですぐさま警官に連行された。警察とのやりとりが生中継される。これが神聖かまってちゃん史に残る「踊り子マーニャ事件」である。



インターネットという未来現代的なものをもっていながら、↓

インターネットという未来現代的なものをもっていながら、行動はおどろくほどアナログ。の子のバイオリズムの振り幅が大きくてライブはそれがよく反映されるので彼らじつはどのバンドよりも身体性「ライブ」を感じさせる。

デジタルという印象があるが、これほどまでアナログ感のあるバンドはいまの時代なかなか珍しい。

この事件は、パソコンだけつかっててもだめだった。実際に身体をつかって行動をおこすというひじょうにアナログ的なものが必要だった。それは勇気だ。通信媒体に勇気（アナログ）をのつけることによって神聖かまってちゃんの存在がおおきくなる。

ビートイットを踊って警察につっこめば100パーセント話題になる。一旦やってしまえばあとからやる者は二番煎じになってサムくなってしまうため、向こう三〇年はだれも同じことはできないだろう。勝利の方程式だ。みんなわかっている。しかし、それがなかなかできない。

とくに、いまの時代エキセントリックな行動・規律を無視した行動をすると想定していないおおくの人間にその情報が知られ、動画があるならアーカイブが残ってしまう。

みんなそれを避けたいと思っている。

しかし、の子は規範から外れた姿のアーカイブが半永久ネットに残ることを恐れなかった（いや、わからないけど）。

ネットができてなんでもできるというけれど、ネットができたせいでできるものもできなくなるというジレンマは当然起こっている。昔できたことが今できなくなるということもある。

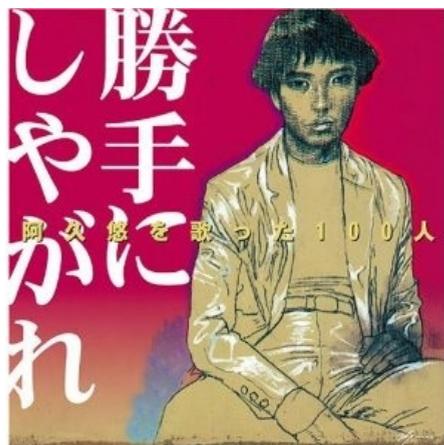
なんでもできる事とそれが許される事なのかは別の話だ。だからわたしは「なんでもできる」という大人の何も考えずにいっていることばにはうんざりなのだ。

↓

わたしたちはたまねぎ剣士である。何者でもないので仕方なくその姿でいるだけ。でもがんばれば必ず何か未来あるものにジョブチェンジできるという大人の期待を背負わされている。

これはなんだかいやな感じだ。

しかし、作家の阿久悠はこういつている。



「アマチュアは怖い。なにが出てくるか分からない。ドキリとしたものを作ってくる。ずっとおれはアマチュアでやっていくよといわれると、とても恐ろしい。でも、プロごっこを始めると、全然大丈夫。負けるわけがない。」



これ、アマチュアこそすごいぞ！とっている。それこそどんより壁になっている何かを突破するとしている。つまり、タマネギ剣士こそ最強ということである。

いまの時代なんでもできないよ！と気づいているわたしたちは、いまの時代のNGに気づいていることである。どこをどうはみ出ればどうなるか分かっているのだ。それは「いま」の時代に「生きている」者の特権である。

さらに、そこに切りこんで勝負を挑みにいけるのは、まだ何者にもなっていないアマチュア、つまりわれわれたまねぎ剣士だ。

↓

の子もそれらのことを分かったうえで戦いにいき、カウンターをあてにいつてる。つねにのど元一撃を狙っている。

それでないと、こちらに勝機はないからだ。時代と世代はどんどん新しくなる。焦りと迷いがでてくるだろう。でもそこで絶望するならいい。腐らなければいいだけだ。神聖かまってちゃんから学べるのはテクノロジーや小手先の技ではない。勇気である。

←



↓

うおお

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ